



学校教育目標 広い視野と豊かな心を持った、
健康でたくましい生徒の育成

東中だより

圓 困 目 標

- ・健康でたくましい生徒
- ・人の心の痛みが分かり、
思いやりのある生徒
- ・進んで学び、感動できる生徒
- ・規律を守り、責任を果たす生徒
- ・厳しさに耐え、自ら努力する生徒

外部講師による授業をさらに紹介します。

「明日へのチャレンジ=あすチャレ！」

の授業が行われました！

10月10日(火)、パラリンピック、車いすバスケットボール元日本代表の神保康広(じんぼ やすひろ)様にご来校いただき、車いすバスケットボールの説明や体験、生き方を考える講話を、全校体育の時間に実施しました。これは、2015年に活動を開始した日本財団パラスポーツサポートセンター(パラサポ)が行う事業の一環で、学生向けに、「明日へのチャレンジ」の意味を込めて、「あすチャレ！スクール」と題して行われています。都留市教育委員会としての教育事業にこの「あすチャレ！スクール」を加えていただいていますので、今回このような機会を持つことができました。

授業では、まず、車いすバスケットボールの概略の説明があり、その後、生徒たちがチームに分かれて試合をし、実際に体験をしてみました。その後、サプライズとして、教職員同士でも試合を行いました。生徒たちは、一生懸命プレーしたり全校一体となって応援したりして車いすバスケットボールという競技の素晴らしさ、おもしろさ、難しさなどを感じていました。

その後、神保さん自身の人生体験を通した生き方を考える時間となりました。神保さんは、中学校時代のある出来事をきっかけとしたご自身の日常生活での交通事故により下半身が動かなくなり、車いすバスケットボ-

ールの道に入っていったそうです。病院や自分の部屋に長期間引きこもるような、生きる希望を失った日々の生活の中で、友人をはじめとした多くの方々の思いやりや支え、多様な人々との出会いにより人生観・世界観が開かれ、ご自身の生きる道を見いだしていくこととなったそうです。友人に誘われて車いすバスケットボールを初めて見学したとき、自分が思っていたような「可哀想な人たちのスポーツ」とは全く違い、皆笑顔にあふれ生き生きとプレーしていた選手の皆さんの姿が今でも忘れられないそうです。神保さんは、そのような人々との出会いの中で自分の人生が再度花開き、気がつけば日本代表として諸外国でプレーしていた自分の人生がどのようなものであったのか、生徒たちに向けて心で伝えてくださいました。神保さんの車いすを自在に操るテクニックや実際のプレーを間近にしたときには、生徒たちは驚きの連続でその様子を見ていました。生きる希望を全く失ってしまうような体験をしてこられた神保さんの授業当日の姿は、はつらつ、堂々としていて、そして愉快で楽しく、授業内容のすべてが説得力あるものでした。自分の人生をよりよく変えていくきっかけや原動力となったいろいろなお話をしてくださいましたが、



- ・「友達」の大切さ
- ・「知る」ことの大切さ
- ・恥ずかしかったり失敗を恐れたりすることもあるかもしれないが、行動すること、やってみることが一番大切であること
- ・ミラー（かがみ）の法則で行動すること（周囲の人や自分以外の物事の姿は、鏡に映った自分の姿であること）

などを自らの体験になぞらえて伝えてくださいました。神保さんはこのような考え方で自ら行動をはじめ



た結果、アメリカに行ってスポーツを学び、日本人初のプロ選手になりたいという、さらに大きな夢を持つようになったそうです。その夢を実現するにはお金や英語力なども必要でしたが、これも周囲の人々などの協力があり、夢に向かって努力することができたとのことでした。

最後に、「興味あることを見つけて楽しむこと」と「知識と経験は人生の宝物であること」を生徒たちにアドバイスしていただき、「あなたにとっての「あすチャレ！」って、なに？」という問いを結びの言葉としてくださいました。

今回の事業紹介のホームページによると、パラサポプロジェクトは、「SOCIAL CHANGE with SPORTS」をスローガンに、パラスポーツを通じて、一人ひとりの違いを認め、誰もが活躍できるダイバーシティ&インクルージョン（D&I）社会の実現を目指しており、他者のことを自分のことと考える心、障がいとは何か、可能性に挑戦する勇氣、夢や目標を持つ力などを考える深い学びにつながるとのことです。当日の時間は、まさにそのような時間であったと実感しています。

これからの時代を生きる生徒たちにとっては、人間として時代を超えて変わらないものを基盤としながらも、時代の変化にあわせて身に付けていく必要のある力もあります。障がいばかりでなく、そもそも人は皆違い、その違う人々が創る社会は「多様性=ダイバーシティ（Diversity）」に満ちているということ、そして、そう

いう違う人々の誰もが一人の人間として人生を等しく全うできるような、誰をも包み込むことができる（インクルージョン=Inclusion）社会にしていくこと、このようなことをそれぞれの分野で理解し実現していく力は、これからの時代を生きる生徒たちにとっては必須の力となっていきます（DiversityとInclusionでD&I）。

例えば、ヨーロッパとその付近を見れば、早く終わって欲しいと願う一つの戦争に加え、最近ではさらにもう一つ、悲劇的な戦争が始まってしまいました。ヨーロッパ大陸やその周辺は、国境が地続きで、人種、宗教、文化、歴史、習慣、考え方など、全く違う人間がすぐ隣にいる多様性の社会です。戦争の事実、そのようなお互いの違いを乗り越えるということが時としていかに難しいかということを感じさせられます。日本も少子高齢化の社会で、宗教や文化、生活習慣などがおおよそまっていた時代から、外国の人の力も借りて共存共栄する中で、日本をつくり直していかなければならない多様性の時代に突入しています。東桂中学校の生徒たちもヨーロッパの人たちと同じように、「全く違う人が自分のすぐ目の前にいる」という社会で生きていくこととなります。

神保さんにおかれましては、スポーツの力で社会を変革していくこと（SOCIAL CHANGE with SPORTS）にご尽力いただいています。生徒たちも、今回の授業を貴



重な機会として、将来のそれぞれの分野で、豊かな自分の人生と社会を実現していけるよう、学校教育目標にあるように「広い視野」を持って成長して欲しいと願っています。

神保さん及びそのスタッフの皆様、今回は誠にありがとうございました。また、都留市教育委員会に対しましても、深く感謝申し上げます。

「アスリート訪問」

の授業が行われました！

10月25日(水)、フェンシング日本代表で、現在パリオリンピック代表権獲得に向けて熾烈な戦いを繰り広げている木村鞠乃(きむら まりの)さんが東桂中学校を訪れ、全校体育の時間として授業を行っていただきました。当日は、フェンシングの動きや、生徒や教職員とのフェンシング対戦も行いながら授業が進行しました。



木村さんは滋賀県大津市出身で、ご両親や親類がフェンシング経験者でしたが、小学校時はアルペンスキーに挑戦し、中学校ではバドミントン部に所属、フェンシングを本格的に始めたのは高校からという異色の経歴を持ち合わせています。フェンシングを始めたのは比較的遅い時期でしたが、アルペンスキーやバドミントンで鍛えた足腰の強さが大いに現在の力になっているとのこと。高校時代は勉強とフェンシングの両立で死にもぐるいで、部活の最中に倒れて救急車で運ばれたことが3回もあったそうです。このような生活を通して、時間を有効活用するスケジュールリングの能力やチャレンジ精神が身に付いたとのこと。



このような努力の結果、女子サーブルで、JOC ジュニアオリンピック優勝、インターハイ準優勝、全日本学生選手権個人・団体女子サーブル優勝、全日本選手権個人女子サーブル8位、U-23 モンゴル大会団体女子サーブル2位、ワールドカップフランス大会出場など、輝かしい成績を収めています。そして、現在は、ワールドカップなどの国内外の大会を通して、パリオリンピック代表権獲得を目指し、戦いの真っ只中にいます。この

このような努力の結果、女子サーブルで、JOC ジュニアオリンピック優勝、インターハイ準優勝、全日本学生選手権個人・団体女子サーブル優勝、全日本選手権個人女子サーブル8位、U-23 モンゴル大会団体女子サーブル2位、ワールドカップフランス大会出場など、輝かしい成績を収めています。そして、現在は、ワールドカップなどの国内外の大会を通して、パリオリンピック代表権獲得を目指し、戦いの真っ只中にいます。この



学校だよりをお届けする少し前までは、アルジェリアにいるとのことでした。

このような挑戦を続けている木村さんですが、スポーツ選手には付きもののケガに悩まされ、思い通りの成績が出せない時期が続いています。当日の授業や対話を通して感じたことは、木村さんはフェンシングというスポーツだけでなく、自分はどのように生きていったらいいのか、人間とはどのような生き方をしたらいいのか、というようなことを広く深く考え、自分や人生と向き合っているということでした。とても明るい笑顔と雰囲気裏に、迷いや苦悩、悲しみや苦しみを乗り越えようとしている人間としての姿を感じさせていただきました。当日のいくつかの話題の中には、次のようなものがありました。

・富士山は、いつも見ている皆さんにとっては普通のことだと思いがちですが、「あたり前」のことだとは思いますが、こんなにすごい世界文化遺産があるということはすごいことです。私はパワーをもらいました。

・これまでの生活の中で、「ハイ死ねー」、「ハイ帰れー」というような言葉を浴びせられることもありましたが、自分はこれらの言葉を真正面から受け止めてしまい、本当に苦しく辛かったです。いろいろなことがあって、大学

の大会で優勝したときも、自分を信じることができませんでした。もちろん、「過信」はいけないと思いますが、自分に自信がありませんでした。

・あるとき、「まりは、まりのままでいいんだよ」と言われ、心が晴れてきて自分の中で少しずつ変わり始めたものがありました。小さな幸せを見つけられるようになり、あたり前の幸せに気付けるようになったら、心の自由を得ることができました。フェンシング漬けの生活の中で、私はこういうことがわかっている(人として大切なことを理解している)人たちと戦っていたのか、と気がきました。私は、自分のことをアスリートだとはあまり思っておらず、一人の人間として人生を生きたいと思っています。人は、生きていただけですごいんだと思っています。



・人とコミュニケーションをするということは大切なことだと思います。世の中にはいろいろな人がいて、自分の思い通りではない人もいます。でも、本当の悪人は別として、人を非難・攻撃する前に、「人を大切にしてみる」ということは大切だと思います。人のことをすぐ「嫌い」と思うのではなく、「そういう人もいる」と捉え、物事をいい方向に考えるようにしています。イライラしている時間は、人生の時間としてもったいないと思います。



・試合も一本一本違い、人も一人一人違います。それぞれ違う人生の中で、思い通りにいかないことや失敗などがあるかもしれません。しかし、やり直しはできると思います。ですから、いつでも「リスタート」していけばよいと思っています。



そして、授業の結びとして、「人生は何があるか分からないけれど、せっかくの人生を謳歌して欲しい」というメ

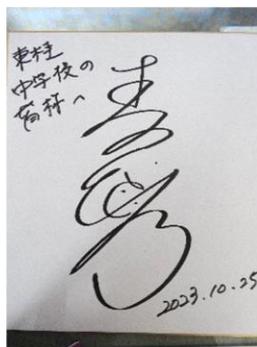


ッセージとともに、ご自身のモットーである『「今」を生きる!』という言葉も生徒たちに向けて送っていただきました。

生徒たちも、近所のお姉さんのような感覚でお話が聞けたと思います。それぞれの人生

で状況は異なるとは思いますが、現在では、自分で意識している、いないに関わらず、自分の生活は世界の状況と直結しています。そのような意味で、直接世界に挑戦する木村さんの姿から学んだことを、自分の生活や人生に活かして行って欲しいと思います。

木村さんは、オリンピック前の学校訪問は東桂中学校で最後にしようと考えていたそうです。授業会場の体育館に入った瞬間に、生徒たちの自分を迎え入れる温かさをとても感じた感激していました。いくつか学校を訪問した中でも、東桂中学校の雰囲気は格別だったとおっしゃっていました。そんな生徒たちのことを「きれいな心の集団」と表現してくださいました。



学校にはサインもいただき、そのサインは最近新しく変更したものだそうですが、東桂中学校へのサインが第一号だそうです。学校の職員玄関前廊下のガラスケースに納めてありますので、学校へお越しの際は、ぜひご覧ください。

また、学校訪問の様子は、ご本人のInstagramやアスリーチというサイトでも紹介されています。



今回は、お二人のアスリートを外部講師に迎えての授業の様子をご紹介します。教職員が生徒たちのよりよい成長のために工夫して教育活動を展開しております。

現在の社会は、複雑・多岐に専門性が分かれた社会になっています。そのような社会に船出する生徒たちを育てる学校は、もはや学校の人的・物的資源だけでは必要な教育を行うことは困難です。多くの人の力を借りて次世代を担う子供たちを育成していく必要があります。引き続き、保護者・地域の皆様の、学校教育へのご理解とご支援をよろしくお願い申し上げます。